

from 濱本章子さん

〈大阪地方裁判所裁判官〉

司法試験合格の先を見据えた 高いレベルの学問、人材の宝庫です

私が法曹を目指すようになったのは高校生の頃でした。それから大学を経て司法試験を通過し、司法修習生になるまでの長い間、第一志望は弁護士だったのですが、実務修習の時に裁判所で裁判官の仕事を目の当たりにした時、「自分にはここが一番合っているかも」と思うようになりました。依頼者の立場に左右されず、憲法と法律、そして自分の良心に従って判断を下すという、もっとも中立公正な立場で自分の力量を発揮できるところに魅力を感じたからです。

このように進路は少し変わりましたが、いまの私の土台を作ったのは、京大法学部での濃密な4年間でした。まず、授業のレベルが非常に高かったですね。どの先生もご自身が研究する学問に自信と誇りを持っていて、独自の哲学に則った体系的で美しい理論を示してくださいました。法曹を目指す学生はつい司法試験対策に意識を傾けがちですが、いざ司法の現場に立つ身になってみると、試験勉強で得た知識よりも授業で先生方が語ってくださった、現在運用されている法律の原理原則やその背景にある歴史・精神性といった根源的な部分を培っておく大切さを痛感します。

当時の私は軽い気持ちで「せっかくだからいろいろ勉強しておこう」と、様々な法学の授業を履修していました。そのために大変な思いをしたこともありますが、多くの先生の考えに触れることができたほか、学生同士で議論する機会もたくさん得られ、とても贅沢で有意義な時間を過ごせたと思います。これから京大法学部で学ぶ皆さんにも欲張ってなるべく多くの授業を受けてもらいたいですね。

これでは私がまるで模範的な勤勉学生だったように思われるでしょうが、実はそうでもないんです（笑）。京都大学推理小説研究会(通称・京大ミステリ研)というサークルの活動もやっていました。メンバーが作った作品の「犯人当て」をしたり、評論をしたり。楽しかったですね。OBには作家になった人もいますよ。推理小説の醍醐味は、作者が仕組んだ巧妙なパズルを解くところにありますが、私が裁判所で扱っている民事の紛争も、推理小説と同じような面があります。最初のうちは事態が混乱してなかなか事実が見えてこないのですが、出来事や証拠を一つひとつ整理していくと、混乱を招いた原因や解決の糸口が浮き出てくるのです。サークルに限らず、法学にはあまり関係のなさそうな課外活動でも、あとで思わぬ形で結び付いたりするので、興味のあることは学生のうちにどんどんやっておくといいですね。

もう一つ、私が挑戦してよかったと思うことは、判事任官後、2年間にわたって京都大学法科大学院の実務家教員として教壇に立ったことです。週2回の限られた時間ではありましたが、民事訴訟の仕組みや裁判官の仕事などについて話し、法律家を目指す人たちと直接ふれあうことができました。いまでは教え子が多数実務家として活躍しています。私は彼らが法曹になる課程に関与できたことを、とても誇らしく、幸せに感じています。

こうして自分自身の学生生活や教員経験を振り返ってみると、改めて思います。京都大学法学部は、法曹をめざす場合、どういう法律実務家になるか、法曹としてどういう仕事をするかといった、普通であれば社会に出てから本格的に考え始める課題を早い段階から探求でき、多くの成果を得られる場所だったのだと。高度な授業を展開してくださる教授陣とともに机を並べる学生など、目標や刺激をくれる素晴らしい人材が集う、こんなに恵まれた環境の大学で学ぶことができた私は、本当に幸運だったと思っています。

from 岡野結城子さん

〈外務省〉

学生の受容力が大きい町、京都 憧れをかなえた有意義な学生生活

私はもともとは理科系の勉強をしていました。京大に惹かれたのは高校2年生の時、利根川進さんがノーベル賞を受賞され、過去にも京大はノーベル賞学者を多く輩出していることを知り、そういう環境で勉強をしたいと思ったのがきっかけでした。また、自由な学風にも魅力を感じて、京都大学に行きたい「京大病」にかかったのです（笑）。イギリスへ留学をした経験から外交官や国際関係の仕事に強く興味を持つようになり、高校3年生で思い切って文系に転向しました。が、「京都に行きたい」という思いは変わらず、自分の興味から、法学部受験を決めました。

憧れの学生生活は、憲法の佐藤幸治先生や国際政治の高坂正堯先生など、超のつく有名な先生が教鞭をとられ、とても恵まれた環境でした。一方で、カリキュラムはつめこみでもなく点数主義でもなかったので、余裕のある時間を過ごせました。弓道部に入部して3回生までは部活動に打ち込み、また哲学の道や鞍馬を散歩したり、大文字山に登ったり、いろいろな場所に出かけたことも楽しい思い出です。あまりに充実した4年間でしたから、いまでも京都が恋しく、2年に一度は京都へ旅行に行きます。当時通った定食屋さんなどはとても懐かしくて、つい顔を出しちゃいます。

将来の進路は入学当初から、外務省を第一希望としていました。留学していた高校生の頃の日本は経済力が強く、イギリスにも日本の電気製品がどんどん進出し、注目されていました。にもかかわらず、日本という国自体はあまり知られていないという現実直面し、悔しかったのを覚えています。「日本のプレゼンスはもう少しなんとかならないのか」という思いを持ちました。外交官試験の勉強をしたのは、部活動を引退した3回生の秋から4回生の6月頃まで。集中的に勉強をして、ダメだったら民間企業に行こうと決めていました。

現在所属する西欧課では、イギリスやフランスなどヨーロッパの22カ国を担当しています。課のメンバーはそれぞれ、ある国を担当するのですが、首席事務官というポストは全体を見る立場ですから、部下からの相談を受けることが多く、また人事、予算といった業務にもかかわっています。現状、日本との間にとりわけ問題がない諸外国についても、その関係をいかに良好に維持していくかということを意識し、外交の機会を作っていかなければなりません。

就職後にイギリスのケンブリッジ大学に留学したのですが、海外では大学の成績がモノをいいますから、低調な成績ではどこも採ってくれません。その時ほど「あ〜もっとちゃんと勉強しておけばよかった」と思ったことはありませんでした。将来、留学を考えている人は、真面目に勉強し、良い成績をとっておくことをオススメします。

大学生活では、いろいろなことを見聞し、人間的な視野を広げてほしいと思います。ただし京大は、自由で好きなようにやらせてくれる反面、自己責任が問われる場所ではないでしょうか。京大に入って自分は何を勉強するのか、何をしたいのかという思いは、しっかり保持されるほうが良いでしょう。勉強する気になれば、超一流の教授陣がいますし、それ以外で夢中になれるものを見つけても良いです。要するに、自分自身で責任を持った行動をとれさえすれば、とても有意義な学生生活が送れるということです。

岡野結城子さん（おかの・ゆきこ）

1989年京都大学法学部入学、1993年同学部卒業。同年外務省に入省。ケンブリッジ大学に留学し、社会政治科学や国際関係論などの社会学を学び学士を取得。現在は外務省欧州局西欧課首席事務官。趣味は旅行や食べ歩き。

濱本章子さん（はまもと・あきこ）

昭和57年京都大学法学部入学、同61年同学部卒業。平成元年司法試験合格後、司法修習生を経て、同4年判事補任官、同14年判事任官。同17～19年、裁判所業務の傍ら、京都大学法科大学院の実務家教員としても活動。現在は、大阪地方裁判所にて主に民事事件を担当する。私生活では1児の母。

from 久保秀雄さん

〈京都産業大学法学部法政策学科 助教〉

法社会学者として生きる道を切り開いた
「青春」を誇れる充実した四年間

私は京都大学にいい意味で裏切られました。大学がこんなに面白いところだなんて、入学前にはまったく予想していませんでした。たとえば、「政治学入門」の授業では、先生が文学について熱く語ってくれるんです。もちろん、高度な政治学と絡めた内容でしたが、講義のあまりにも面白さに、大学とはこういうところなのかと心底驚きました。ほかの授業に関しても先生それぞれの興味関心がうかがえるような、とても知的刺激に富んだ内容で、自然と話に吸い込まれました。いつのまにか学ぶことそのものが以前とは比べものにならないほど好きになっていて、自分も先生方のようにワクワク楽しみながら学問に取り組みたいと思うようになりました。

そこでチャレンジしたのが、「現代法学研究会」というサークルの活動です。約20年前に法社会学のゼミ生たちが、向学のために自主ゼミとして結成したそうです。大まかな活動内容は、各自が興味関心をもつ時事問題などを調べてきて皆で議論しあい、その成果をもとに論文集を作るというもの。マスコミをめざしている人なら報道に関するパートを立ち上げるといったように、各自が好きなテーマに取り組むことができました。ただし、仲間内の議論だけでは机上の空論になりがちなので、フィールドワークを重視していました。現場での調査は法社会学にとって重要な研究方法になります。サークルで仲間と一緒に楽しみながら活動するなかで、法社会学のトレーニングを積み重ねていたわけです。

そうした活動を続けていると、ホームページで紹介されるとか、出版物の参考資料になるとか、意外な反応が返ってくるのが度々あり、学生でも熱心にやっていたら評価してもらえるんだな、と感激しました。同時に語り手としての責任感も芽生えてきて、とつつきにくい話をわかりやすく伝える方法を自分なりに工夫するようにもなりました。そうしたサークル活動の成果は、大学のゼミにおいても大変役立ちました。多いときは自主ゼミを含め四つのゼミをかけ持ちしていたんですが、どのゼミでも活躍することができ、手応えを感じました。

進路を決定したのは4回生のときです。入学したころは、4年で卒業してコンサルタントか公務員にでも……という考えで、研究者になろうなんて発想はまったくありませんでした。しかし、自主ゼミなどを通じて研究の面白さに目覚め、周りの人たちからも「研究者向きだね」などと言われ、そちらの方向に傾いたんです。そしてなにより、法社会学自体がやり甲斐のある学問だと思うようになったことがポイントでした。法社会学が法律学のほかの分野と大きく違うところは、現場すなわち社会にひじょうに近い点でしょう。法律が実社会でどのように運用されているか、そこに何らかの問題があるとすればその原因は何なのか。法社会学はこのように実態の解明を行い、その成果を政策提言にも結び付けていきます。社会の現場には、六法全書に書かれていなくても、見落としてはならない大切な問題がたくさん転がっています。そうした問題を発見し、その解明に取り組むことは、すごく意義のあることだと思っています。

研究者であると同時に教育者でもあるいま、京大の先生方から受けたハイレベルかつユニークな授業のすばらしさや、課外活動に打ち込めた環境のありがたみをひしひしと感じています。まさに青春だったと胸を張って言える私の充実した四年間。その喜びを分け与える意気込みで学生たちと接する日々です。

久保秀雄さん（くぼ・ひでお）……………平成9年洛星高校卒業、同年京都大学法学部入学。同21年京都大学大学院法学研究科博士課程修了。京都大学博士（法学）。同21年より現職。専門は法社会学。



from 佐々木太一さん

〈警察庁〉

学びがいのあるハイレベルな授業
法律の面白さを実感させてくれた場所

高校時代、私は社会の仕組みを勉強したいという思いから、文学部（社会学）に進学するか、法学部（法律学）に進学するかについていろいろ悩みました。最終的に法学部への進学を決めたのは、法律というものは様々な価値観の集大成であり、条文の一条一条には各種の利益・価値観を合理的に調整する哲学的な根拠があるということを知り、面白そうだなと思ったからです。特に京都大学を選んだのは、京都という歴史のある町で四年間を過ごしたい思ったからと、自由な学風の下、研究活動が盛んであるというイメージに惹かれたからです。

この私の期待どおり、京都での四年間は、多くの友人にも恵まれ、とても充実したものとなりました。特に、京都という場所柄から、各種の神社仏閣を訪れるなどして、歴史に直に触れる機会を得たのは京都ならではの楽しさでした。また、東京と違い、時間もゆっくり流れるような気分でしたので、とてものんびりと、悠々自適な学生時代を過ごすことができたと思います。学生時代を京都で過ごしていたことは、今でも多くの人から羨ましがられますが、学生生活を送るには最高の場所だったように思います。

入学時は、家系的に教師が多いということもあり、大学の先生になりたいと思っていました。しかし、友人達と将来について議論していく中で、一人のプレーヤーとして、世の中に携わりたいという思いを抱くようになり、ある種漠然とした思いではありましたが、司法試験の勉強を始めました。このときは、法曹（裁判官、検察官、弁護士）になりたいという思いもありましたが、どちらかといえばチャレンジ精神のようなものが大きかったように思います。この勉強はとても大変なものでしたが、このとき吸収した法的な考え方や知識は、今でも自分の財産になっていると思います。

残念ながら在学中は合格することができませんでした。ちょうど私が大学4回生の時に法科大学院制度が始まったことを契機に、卒業後、法科大学院へ進学しました。友人の多くはそのまま京大の法科大学院へ進みましたが、私は以前から、就職は東京でしようと思っていたことから、東大の法科大学院に進みました。

法科大学院では、卒業後に司法試験を受験するというシステムになっていることから、自分の進路を再考する時間が得られ、結果、社会に不可欠な仕事がしたいとの思いを強く抱くようになり、警察庁を目指そうと決心しました。

無事、国家公務員Ⅰ種に合格し、警察庁に就職しましたが、その後に司法試験を受けることも決めていました。試験は就職後1カ月半後という時期に行われ、交番研修や夜勤などを並行しながらの受験であったためとても忙しい日々が続きましたが、無事合格できたときはとても嬉しく思いました。

現在の主な仕事はマネー・ローンダリング対策ですが、身近な例で言えば、銀行で通帳を作るときに本人確認を行ったり、ATMの振込みの限度額を設定したりするといったことを義務付ける法律に携わっています。犯罪による違法な収益が発生した後に、その資金の流れをいかに追跡するかを考える仕事、と言えば分かりやすいでしょうか。学生時代に法律を包括的に学んだことにより、自分に多少なりとも法律の基礎が身につけていることは、今の仕事でもたいへん役に立っていると思います。今年の7月から2年間、アメリカの大学院へ留学することが決まっていますが、取り調べの可視化の導入など、警察の将来に関わる仕事に直結するような、先駆的なアメリカの法律を勉強し、今後に生かしたいと思っています。

佐々木太一さん（ささき・たいち）……………2001年岩手県立盛岡第一高等学校卒業後、京都大学法学部入学。2005年同学部を卒業後、東京大学法科大学院に入学。2006年国家公務員第Ⅰ種試験に合格し、2007年警察庁入庁。同年司法試験に合格。警視庁池袋警察署、警視庁組織犯罪対策部組織犯罪対策第四課、警察庁交通局交通企画課での勤務を経て、2010年10月から警察庁刑事局組織犯罪対策部犯罪収益移転防止管理官にて勤務。趣味は日本酒。



from 森本朋敦さん

〈経営コンサルタント〉

初心を忘れず、心の赴くままにチャレンジ
自分の世界を広げ、生涯の仲間と出会える貴重な場

私は奈良の高校に通っていたので、関西にある京大は身近な存在でした。当時は水俣病、四日市ぜんそくなどの公害訴訟が盛んで、高校1、2年の頃に「将来は、行政訴訟を担当するような弁護士になりたい」と思うようになり、法学部を志しました。

入学当初は弁護士志望だったので、司法試験の勉強のために法律書を読んでいました。政治にも興味があり、法学部のサークル「国際政治研究会」に所属し、これが学生生活のベースになっていきました。行政訴訟などの政治的な問題を扱い、多少なりとも誰かの役に立つようになりたいという思いが根本にあったのです。

一方で、1年の半分ぐらいは信州に行き山登りをするという生活を送っていました。そして3回生になると興味が海外へとシフトするようになり、以前から行ってみたいと思っていた中国へ行きました。日本にいただけではわからない、そして経験できないことばかりの日々にカルチャーショックを受けました。さらに3回生の春休みには、1ヵ月ほど東南アジアをまわり、結局4回生の1年間は休学してヨーロッパ、インド、ネパールへと…。そんなわけで、司法試験の勉強どころではなくなっていたのです。

結局、大学生活五年間を経て、NTTに就職しました。民営化されて2年目でしたから、会社が大きな変貌を遂げる時期でした。そのうち、漠然と経営コンサルティング的なことに携わりたいと思い始めたのです。まずは経営を理解するために公認会計士の資格を取ろうと、NTTを二年で退職。翌年合格し、監査法人に転職しました。そこがグローバル化の流れでアメリカの会社の傘下に入ることになり、私はコンサルティング部門に異動することになりました。漠然と抱いていた希望のスタートラインに、30歳にして立つことができたのです。

そして2000年に、当時その部門のトップであった、現在勤めている「アットストリーム」の代表取締役ら4名で独立開業することになるのです。めざすは、日本に本社を持ち海外にネットワークを作っていくという、日本初のグローバルな経営コンサルティング会社です。

企業の経営改善コンサルティングが現在の主たる業務内容ですが、さまざまなお客様に接しますので、自分の中の知識や話題が豊富であることが必要です。それを得られたのが、他ならぬ大学時代でした。私は本を読むのが好きで、哲学書や歴史書、宇宙物理学まで読み漁りました。京大では知的好奇心があればそれを満たすだけの時間も仕組みもあり、同様に好奇心の旺盛な仲間にも恵まれました。

大学や学部を選ぶ際は、将来何をしたいのかをよく考えることが重要だと思います。それによって、似たような価値観を持つ、気の合う仲間と自然に出会えるようになる、というのが私の実感です。今でも法学部の同期や旅行で知り合った仲間と、定期的に交流をしています。彼らと分かち合う時間は、かけがえのないものです。法曹界、国家公務員、起業家、研究者、南極越冬隊に3回行った人、30歳になってから8年間海外を放浪した人などバラエティに富む彼らから、いろいろな刺激を受け元気をもらえます。

高校当時の弁護士志望から、現職の経営コンサルタントと、結果は違いますが、思い返せば志だけは変わっていません。人間ですから時には落ち込むこともありますが、成長していくためには高い志を持ち、それを忘れないことが大切です。そうすれば努力も苦にはなりませんし、さまざまなことに関心を持ち勉強し続けることができます。知的好奇心を満たし、生涯の仲間と出会える貴重な場と時間を、ぜひ存分に生かしていただきたいですね。

森本朋敦さん（もりもと・ともぶ）……………昭和58年京都大学法学部入学、同63年同学部卒業。同63年NTT就職。平成2年退社。同3年公認会計士2次試験に合格し、朝日監査法人（現 あずさ監査法人）に入社。同7年グループ会社のArthur Andersenで経営コンサルタントとして活動開始。同12年に独立し@Streamを開業。現在は経営コンサルタントとして、経営管理制度の構築、収益構造改革の企画・立案・実行支援、各種業務プロセスの改革及び情報システム再構築支援に携わる。



from 野村正育さん

〈NHKキャスター〉

多様性を認め合う風土で培われた
新たな放送ジャーナリズムの魂

NHKのアナウンサーとしての私の出発点は、京都放送局でした。つまり、大学と初任地がともに京都だったわけです。あわせて12年過ごしました。自由を尊重し多様性を認め合う風土のなかで、京都でしかできない経験、京都に暮らしてこそ得られるものをたくさんいただけたと、いま振り返って思います。京都大学の法学部もそんな京都の空気の流れにもれず、いろいろな価値基準や尺度が尊重されますから、自分がやりたいことをのびのびとさせてもらえる雰囲気にも満ちていました。きっと現在も、それは変わっていないことでしょう。

私はそんな京都大学で、まずバレーボールの同好会に入りました。しかし、同好会では物足りなくなり、2年の終わりごろになって、体育会のバレーボール部に入部することにしたのです。いまでは就職活動の時期が早まっているでしょうから、2年の終わりからですと、実質1年ぐらしか真剣に部活動をするのができないのではありませんか。しかし当時は、就職活動も司法試験や大学院進学のための勉強も、もう少しゆったりとしていましたから、4回生の夏まで私はすっかり部活に没入りしていました。

3回生の終わりぐらになって進路について真剣に考え始めました。ものごとをじっくり調べるのが好きな性質の私は、研究者を意識するようになり大学院への進学をめざすことにしたのです。3年、4年では国際法のゼミに所属し、修士課程では西洋法制史を専攻。法と社会のあり方について、それぞれの国の文化と社会秩序の関係性といったアプローチからの研究を主としていました。

修士の2回生になり、そのまま博士課程に進んで研究者になろうかというときに、研究者として専門を深めていくよりも、自分が調べた事実や成果を、多くの人に知ってもらい直接的に社会の役に立ちたい、と強く思うようになりました。その結果、意識したのがマスメディアでした。新聞や出版も考えたのですが、たまたま最初に受けたのがNHKでした。ただ、ずっと関西で育った私は当時、アナウンサーはまったく考えのなかにありませんでした。記者志望者も受ける音声試験のときに「きみ、鼻濁音ってわかる？」と聞かれて「なんですか、それ！？」と聞き返すありさまでしたから、試験官たちに「ユニークなのが来た」と面白がられましたね。そんなプレッシャーのない気楽な受験が功を奏したのか、アナウンサーとして採用されることになったのです。

当時、磯村尚徳さんをはじめとするキャスターニュースが全盛の時期で、アナウンサーもしゃべるだけではなく取材ができなければダメ、という新たな放送ジャーナリズムが生まれつつありました。自分がちゃんと検証・納得した事実を伝えてこそ、お茶の間のみなさんとの「シェア」が可能になるのです。その意味では、3回生から大学院までお世話になった上山安敏先生が存在が大きかったと思います。従来の学問の枠や常識にとらわれず、ものごとを深く掘り下げ徹底的に突き詰め、真理に近づこうとするその姿をずっと近くで拝見することができましたから。

アナウンサーとして四半世紀になろうとしているのですが、「生放送の魅力」が、私のモチベーションの根底にあり続けています。生放送はリスクと隣り合わせゆえ、瞬間的な集中力が要求され、それが「アドリブ」という形で現れます。そのアドリブが視聴者の心を捉えるとき、単なる記事の読み上げにとどまらない、お茶の間との一体感を実現する報道になるのです。

アドリブというのは、型にはまった知識や視線からは出てきません。幅広い知識と、多様な角度から複眼的に物事を見ることが必要です。それは、自由が尊重され、のびのびと勉強ができる京大で培われた、私の大きな財産のひとつなのです。

野村正育さん（のむら・まさいく）……………昭和55年京都大学法学部入学、同59年同学部卒業、同年修士課程に進学、61年修了。同年NHKに入局、京都放送局にアナウンサーとして配属。「おはよう日本」「ニュース7（土日）」などのキャスターを務める。現在、福岡放送局勤務。

